

・白選五十一首・



大島史洋

おおしま・しよ 1944年、岐阜県生まれ。慶応大学卒業後、60年「未来」短歌会に入会。近藤芳美、岡井隆に師事する。現在、「未来」編集委員、同誌選者をつとめる。歌集は、『藍を走るべし』『わが心の帆』『炎樹』『時の雫』『幽明』『焔火』など8冊。評論集も、『定型の視野』『定型の方法論』ほか多数がある。

砲丸を雨ふる中に投げあいぬ時おりにはげしくぶつかりて落つ

アパートの前の花壇にこしかけていつまでも君空を見ている

山手線みおろしながら沿ってゆく道しじろと乾きつつあり

歩道橋にひとつとまりてありし傘こころに残る痣の如くに

木の下にたたずみいたるふたりながら手をくむこともなきあたたかさ

降りつづく雨に一日をおくりつつ葉を張る如き感情のあり

さまざまに心つくして歌はあり言葉は泣くと思うときあり

どのへんで君につながる言葉かと面あげしとき笑みて応えぬ

許される感動の範囲が無知ゆえにひろがるものとは思わざりしが

するどさは見ぬくばかりであるまいに沖に吹かるるわが心の帆

水はあふれただ眼の前にあふれたり見るのみにして見透す部分

「藍を走るべし」

「わが心の帆」

昔の歌を読み返して、ま、こんなものだなと思うようになったら、人間おしまいだとかつてどこかで読んだような記憶がある。

戦後ということを意識して、ともかく気張って作歌してきたから、どうも変な時期だったなど、これも、おしまいのような感慨を抱くこの頃である。

自分の生き方、そして、個人と社会ということ、そんなことに或る理想のようなものがあつたから、自縄自縛の歌となつてしまつてゐる。もうすこし伸びやかに、と今となつては思うが、時すでに遅しである。こんなにも思想ということが言われない時代になるとは思つてもみなかった。自分の不明を恥じるばかりである。

おのれのみ生きるにあらねば悔しさを人の仕事に見て帰るかな
忘れまい拒まれてゐる少年が背中を甲羅と耐えていた日を

【炎樹】

いつときの蹉跎をかわし得ぬならばどちらの進路も同じではないのか
ふたたびを甘き思考にやすらがむ人には強くもの言いしかど

みせかけの平和かならばみせかけの円満もある生きしのぐため
闇にありて銀の光を放ちいるしなやかな幹まだ若き幹

さびしさを軒のつららにたぐえし日さびしさを鋭きものとは思わざりしが
わが買ひしさくら草を貧弱と妻は言いぬこういふ感じが好きなのである

【時の雫】

すべり台よりタイヤをころがし遊びおり土の香のたつ公園の朝
残業の部屋の明るさほしいままに己れを通す空想に居る

人の目を離れ来て歩む昼の路地 木の香ゆたかに家を組みおり
救急車やさしき時代の夜を走り網戸にあたる虫のかそけさ

ややありて触覚を出すカタツムリおまえの位置は俺が見ている
夏蜜柑たわわにみのる路地を来て、かく戦えり、とう声は天降りぬ

【いらかの世界】

おおいなる鉄槌のもと素裸の男となりて吾を行かしめよ
なぎさ波しずかに寄する浜に来ぬからだもてあます少年とわれ

終電に吐き出されたる男たちワープしてゆけアトランティスへ
かたわらの一人遊びの静まりて異形の鶴の群れいるばかり

アンニユイを知らざる世代かそれもよしピエロは綱の如く立つべし
夜に入りて積もりはじめし雪のため線路に火は燃ゆ祀ることくに

【四隣】

いま八冊の歌集を通して読んでみて思うに、
『時の雫』の頃までは一本気というか、ある
面では純粹だったなという感慨をおぼえる。
その後、いろんなことを知るにつれてだんだ
んと人間が汚くなってきて、歌の上でもな
なかな本心を出さなくなってしまう。韜
晦^かというのではないけれど、なんのために歌
を作るのかという肝心の衝動に不純なもの
がある、そんなふうに感じてしまうのである。
昔の歌のほうが饒舌^{じょうぜつ}だけれど、物言いは氣
持のよいところがある。

『現代短歌 雁』の第五十三号（二〇〇二年
九月発行）で私の特集をしていただき、そこ
に自選百首を載せたので、ここでは、それら
と重ならないようなかたちで別の五十首を選
んでみた。

『雁』には自筆年譜というのも載っているが、
それを書いたとき、自分のことながら、ま
ごとくに平凡な一生だとあつげなく思わざるを得
なかつた。その時の感慨が私に、ま、こんな
ものかと思わせたわけで、自分のことも人ご
ごのような感じで見られるような気がしてき
た。ならば、もう肩肘^{かたひじ}を張って自分を主張す
る必要もなく、思想の常凡^{たうぼん}を気にする必要も
ないわけで、どうか今後はもっと自然体で素
直にうたってほしいと願うばかりであ
る。

いつまでも戦後をひきずる物言いは椰揄うつつされていてまぶしき君ら
悲しければ歌を思うと書きてきぬ静かに器うつわは満ちつつあらむ

こだわりはもういいと思うが甘いかなひとりの時は家族が大事
傷つきし心の癒ゆるしくみなど知るよしもなく吾は眠りぬ

なりたくて墮ちし亜流はなきものを人のことにて容赦なきかな
のどかなる冬の陽さしや吾に來む末路のいまだ見えぬ樂しさ

たましいの自浄作用ということば何に読みしか折々うかぶ

暖房の音のみひびき明るけれ孵卵器のごとし残業の部屋は

丘の上は図書館なれば少年がうつむきながらおり來るところ

容赦なく日は過ぎゆけど衰えて澄む境地などいまはたのまず

老妻と呼ぶには早いが目めを据えて勝手におしと言いて去りたる

壮快な朝の電車は鉄橋にかかりて奔馬のごとく走るよ

重荷なら捨てよと言いしかなしさの葦を刈つても天は重荷さ

沼の辺の木立を透ときて光るもの耕耘機が徐々に近づいて來る

タンチョウの子は空を飛び來いと親を呼ぶとぞ人間の親を

最後尾に付かんとしたるタクシーが列を離れて走りはじめぬ

どこまでも精神主義がついてくるホームに立ちて汗拭くときも

あなたには何かが足らぬと聞きしとき細き光が空をよぎりぬ

溪流の早瀬となれば梅花藻は水のなかにてなびきつつ咲く

「幽明」

「煥火」